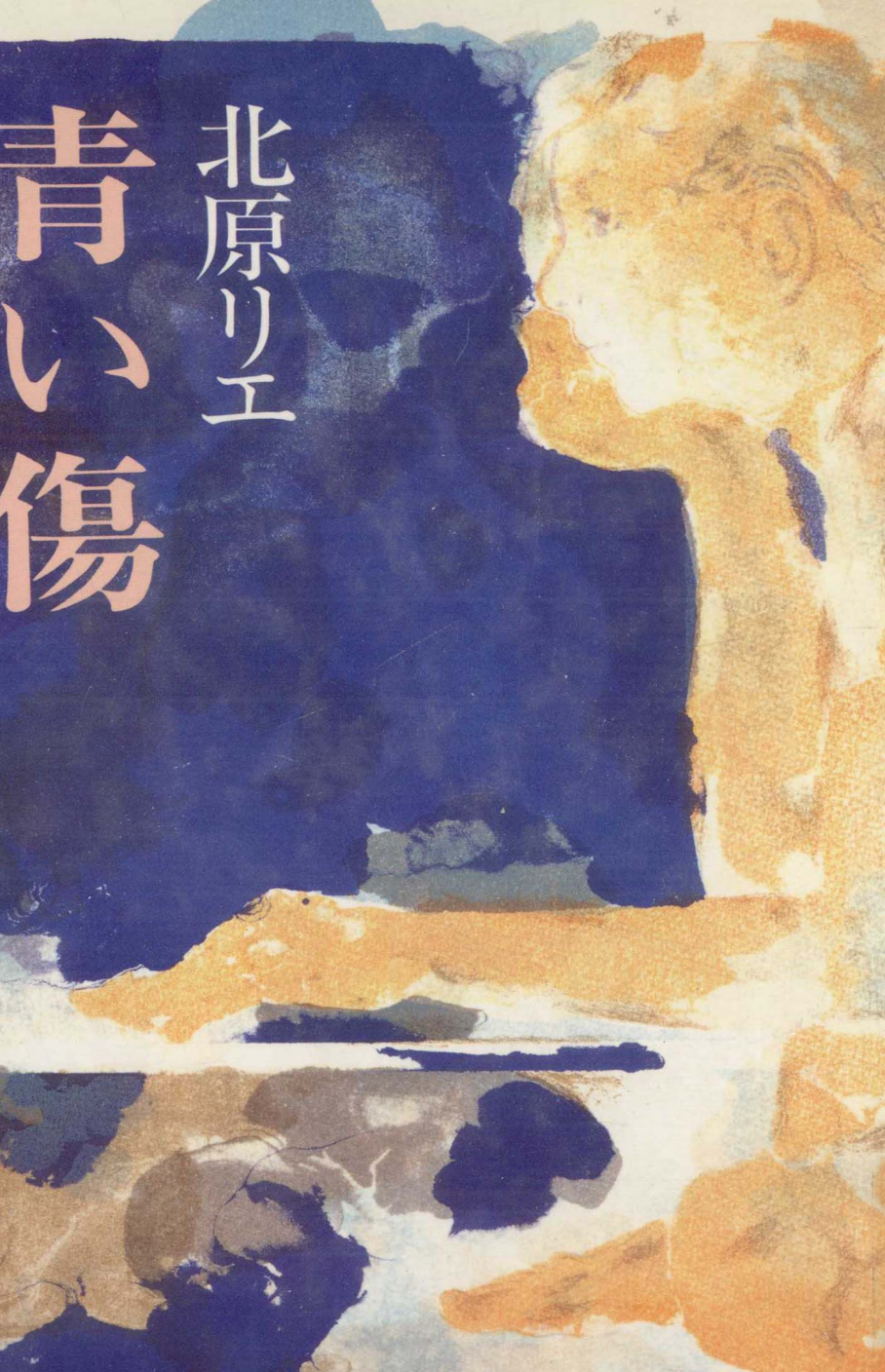


青い傷
北原リエ



い傷

北原リエ

中央公論社

青い傷

一九八九年一〇月一〇日 初版印刷
一九八九年一〇月二〇日 初版発行

著 者 北原リエ

発行者 嶋中鵬二

印刷所 図書印刷

製本所 矢嶋製本

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二一八七
振替 東京二二三四

©1989 CHUOKORON-SHA, INC.

Printed in Japan

ISBN4-12-001876-8

目次

青い傷

5

夏のさかり

45

太るトンネル

113

シーン8

141

第二病棟

169

装画
市野
龍起

青
い
傷

青
い
傷

コンクリートの壁は剝^はげ落ちてゐる。みるみるうちにスタッフの手によって、忘れ去られた地下室そのものに作り上げられてゆく。

ほこりのたった撮影所のセットの隅で、私は二十分近くも転がったままだ。からだにはじかに荒縄が巻きつけられ、オープンにつっこまれる前のローストビーフのように、赤らんだ肉が縄の間から食^はみだしている。手も足もしびれ始めている。マエバリも徐々に食い込んでくる。

撮影所には、同じような鉄の扉がいくつもあり、扉の中は暗い小屋のような空間が広がっている。床は土のままで、扉から少し離れたところに木製の台が置かれている。木台は一メートルほどの高さで、上に乗ったスタッフたちの重みできしんでいる。そのきしむ音が、木台に片耳をあてて転がっている私には、大それた音になって響いてくる。

日の当たらない土の匂いと、測り知れない汗を含んだ木台の匂いとが混じり合
って、なんとも表現できない臭気が漂っている。子供のころにこわごわ覗いた夜
の遊園地のサーカス小屋も、こんな匂いだった。私はこの匂いが嫌いではなかつ
た。というより、馴染んでしまったのかも知れない。

この仕事を始めて二年が過ぎようとしていた。

二年前のある日、女優になりませんか、と道端でスカウトされたのだった。数
日後、私はスカウトマンの名刺を持って撮影所に出かけた。名刺にはプロダクシ
ョンの名が記され、スカウトマンの名前の右横にマネージャーと付されてあつ
た。

スカウトマンと数人のスタッフの面接を受け、台本を手渡された。台本のスト
ーリーは、歴然としたポルノで、それはSMという種類のものだった。

その映画に出演するということは、私の試練であるように思えた。それは突然
うすい膜のようなものになって私を包み、日毎、息苦しさで私をゆううつにして
いった。膜を破る方法はひとつだった。その仕事やらせていただきます、私は、
何の抵抗もないような声で、その言葉をスカウトマンに電話で伝えたのだった。

あのときの膜は、私のまわりを被^{おお}い守っている何枚かの表皮を剥がしてしまう

粘着性のものだったのではないだろうか。

この仕事は、単なる仕事として割り切れなくなっている。マゾヒスティックな性行為を私のからだが好きわけではないが、精神的にはかなり好んで受け入れているところがある。それを自分で認めると、平和に穏やかに生きてゆく才能のない女として自分が浮かび上がってくる。小春日和のない人生。自分を汚物のような食^はみ出し者に感じて惨めになるとき、一方で身ぶるいのするような快感を、私は味わうのだった。

その性癖を、タツも見抜いていたようだった。私とタツの関係が始まったのは、この仕事が始まったころだった。そして私と出会った年に、タツは二十数年間勤めていたテレビ局をやめた。

タツは家庭の匂いがおよそしない男だったが、妻子がいた。長い間別居していると私は聞かされていた。家と多額の慰謝料を要求しつづけているタツの妻は、一方では、子供のためにというタツの言い訳にすがって、タツがいつの日か戻ってくるだろうと思ひ込もうとしているようだった。

私は、タツと親密になってから、一年近くの間、激しく、ときには陰湿に言いつづけた。奥さんと別れてよ、それじゃなきゃ私たちは何も始まらないじゃない

の。何をぐずぐずしているの、私このままじゃ何をするかわからないわよ。タツは決まっとう言い返した。そんなことばかり言ってるなら、オレたちの関係は成り立たない。タツの言い方が冷静であればあるほど、私はその一点に固執し、なおさら爪を立ててひっかきまわした。

タツが制作事務所を始めたのは、ほかに理由があっただろうが、サラリーマンのままでいては手に入らない多額の金を手に入れ、妻との仲を清算したい気持ちが働いていたのは事実だろう。しかし、タツの事業は不本意な方向に走りつづけている。赤字がおそろしい勢いでふくらんでゆく。

いや、タツにとってそれは不本意ではないのかも知れない。タツは破滅に向かって急いでいるようにさえ見える。最近、タツが多額の保険に入ったのを私は知っていた。タツはその理由を決して話さないが、自殺するように自分をしむけているのかも知れない。

私たちは眠れない夜を過ごすことが多くなり、睡眠薬とジンの量が増える一方だった。私は、オモチャのドクターセットのプラスチック製の錠剤を残らず吞み込んでしまった幼児のときのように、いとも楽し気に死んでしまうかも知れない自分が恐かった。が、輪郭のぼやけた夢を追うような甘さが、恐怖感といっしょ

に込み上げてくるのだった。

「あんまり飲み過ぎんと、目が腫^はれてるし、茶のシャドウ入れんとね、顔、ちゃんとじっとしてん！」

メイクのサチさんの声が飛び込んでくる。

セットには、照明が当たり始める。

クレーンの声がする。ガラスに爪の先を擦りつけた音を連想させる。

「このシーンさえ終われば、後は楽やねえ」

サチさんは、私をなぐさめるように言う。それから、いつもの荒っぽい口調に戻して話しつづけた。一月先に私が二十四歳になることや、髪の色艶があまりに悪いこと、ドーランをカバー力の強い六番に変えないと顔がくすんでしまうこと……興味はなかったが、ニュアンスだけは察することができた。とくに若いときならばともかく、長く続けられる仕事じゃないということを言いたいのだ。

そのとおりでろう。けれど、私は、こうする以外にどうやって生活してゆけば良いのか見当がつかない。

クレーンの前では、初めて見かける男優が、小道具さんから手渡された鞭に使う革の黒いベルトを空中にしならせている。あまり筋肉のついていない瘦せたか

らだが、タツに似ていた。浅黒いところも似ている。それだけの理由で私は男優に好意的になった。

助監督二人が、私を持ち上げて、クレーンの下へ運ぶ。

ライトは鳥肌のたった私を生暖かく包んだ。私は、クレーンから落ちて首の骨を折ったレナ姉さんの告別式や、荒縄がずれてベロリと剥けた皮膚の気味悪さや、何度か失神した後の恥ずかしさなどを思い浮かべながら、近づいてくるクレーンのS字型の鉤を凝視していた。麻酔針が血管にあてがわれるときのように、眉にしわが寄る。ふたたび平常な意識に戻るかどうか、それは天運にまかせるしかないような気がしてくる。

S字の鉤に足が引っ掛けられると、からだがり字型に曲り、まっすぐに伸びると、スタッフたちの足元から遠ざかり始めた。全身が氷の固まりを抱えさせられているように痛くなってくる。からだの表面が感覚を失うと、痛みは骨の裏側のほうから鋭さを増してくる。

男優の胸のあたりに、逆さになった私の胸がある。真下には丸く照明がうず巻いていて、私はそこに時折吸い込まれそうな錯覚を起こした。

男優が革のベルトで私のからだを打つと、スタッフたちの影がグラツと揺れた。

自分のうめき声が他人の声のように聞こえる。また革のベルトが私を打つ……。

監督の声、カメラのまわる音、私の声、男優の声、からだを打つベルトの音——それらが聞こえなくなったところ、私は、しなる鞭で作られた揺れに身を甘やかし始めていた。からだは、分泌液だらけの、いびつな固形物になったようだ。

しばらくすると青い点々が散らばり始める。コンクリートの壁にも、カメラ、スタッフたちの影にも散らばっている。青い点は肉体の限界の果てに現われるものらしい。私は、逆さに落ちることはないらしいが、もう揺れに身を甘やかしていることはできない。からだの中の力をなくして、だらりと口を開けたまま動かなくなるだろう。

無数の青い点は、しみのように一か所に集まり、楕円形と長方形とが前後左右上下にバラバラなふくらみ方をしながら、徐々に私のほうへ近づいてきて、インクのようにあふれ、にじみ広がった。私は、もうすぐ自分を喪失するだろう。私はどこへ行くのだろうか……。

……ほんとうに無断で外泊したのは悪かったわ、でもいいモータールが見つかったのよ、昔、タツ、あなたとよく通ったモータール街の裏のほう。眠ってしまった

のは、ジンを飲み過ぎた上にジョイントを吸ったからだと思うの。でも心配しないで、きのうの彼とは深みに嵌^{はま}ったりしないから。だって妻子持ちだもの。

私はタツにそう言おうとして灰皿に目を止めた。途端にひどくおかしいことを言おうとしているのに気づいて、ドギマギした。

妻子持ちだから深みに嵌らない——そんなことは私たちに一パーセントの説得力も持たない。現に今もタツは妻子と別れていない。

タツとは、タツがまだテレビ局でディレクターをしているころ、仕事を通じて知り合った。たまに食事をするようになり、酒を飲み、モーテルのネオンサインを潜るようになり、それが毎晩のようになって、気がついたときは外食とモーテル中毒を起こしていて、転げるように部屋を借り、二年近くになる。

タツは妻子のところへ帰るようすはまったくない。ロケーションに出かける以外には、部屋を離れようとはしなかった。

私たちは、無責任な絆で絡み合ったまま、飽きもせず暮しているのだった。

「無断で外泊はないだろう」

前もって言うてくれれば余計な心配をしなくてすむんだ。タツは、正確にはこう言いたいに違いない。無表情だ。無表情を装っているのだ。頭から押えつけ